

講 評

無藤 隆

一つだけ、大きな論点であったことについて、私の考えたことを申し上げたい。学校で動物を飼育していても、なかなかうまく飼うことが出来ていない。それは、その学校の先生たちに、基本的な誤解がいくつかあるようだ。その誤解の一つは、生まれること、死ぬことを、自然に任せており、それを子どもたちに見せることが教育だという認識を持っている先生がいることである。その中であって、動物の飼い方は教師が教えてはいけないものであって、子どもに気づかせることだという誤解をしている先生方が多いように思う。このことは、基本的には間違いであると思う。これは、生活科発足の時にも論議になったことであるが、ある小学校でザリガニを飼育したとき、数十匹死なせてようやく飼い方がわかったという発表があった。先生は子どもたちのがんばりをしきりに褒めていた。この発表を聞いて、私自身、ちょっと違うのではないかという気がした。やはり、動物を飼育するからには、先生がきちんと飼育のしかたを指導すべきだと思う。もう一つは、適切な飼い方をすればそれで終わりだということではない。動物を適切に飼うことによって、子どもたちは新しい発見をすることができるということが大切である。ウサギに毎日水をあげなければならないということを発見させるのではなく、それは教えた上で、さらにまた貴重な発見が見られるはずである。

第二の誤解は、飼育環境が自然に近ければ近いほどいいのではないかという考えをもっていることである。自然状態というのは、もっと広々としたところで生活することであり、飼育舎の中で自然状態を作ることは不可能なことである。また、学校や家庭で飼う動物はペットであって、野生の動物とは根本的に異なるということである。したがって、ペットとして飼うのであれば、清潔に保つとか、えさはきちんと与えるだとか、そういう条件を整えなければいけない。第三に、動物をとおして命の大切さを教えるというときに、動物があくまでも動物一般であるという感覚をもっているということである。しかし、子どもにとって、ウサギ一般を飼っているのではなくて、「〇〇ちゃん」という名前と呼ぶよ



うに、特定のウサギを対象にしているということである。こどもは、その特定の愛情を与えた動物から学ぶのであって、動物一般から学んでいるのではない。したがって、そのような愛情のある関係をどう育てていくかが大切なことである。

第四に、動物を飼って接しているだけで、命の教育になると考えていることである。それだけではいけないのであって、そこに正しい飼い方があって、愛情をもたせられるような関係を気づくことが大切である。また、動物の生態や特徴を理解させられるような方法があるはずである。したがって、単純に動物のそばにいただけで、命を大切にできるようになるわけではない。最後に、教師一般に、自分たちは教育の専門家であるという自負があり、外部からの支援を受けることは恥であるという考えている傾向がある。そうではなくて、教育は教育の専門家として頑張るけれども、保護者や地域や専門家の支援の上に立って、充実した教育ができるということ、学校関係者は理解しなければいけない。

(白梅学園短期大学学長
お茶の水女子大学客員教授)



研究会に参加して

無藤 隆

1 学校における動物飼育の実践の構築

愛玩、世話、観察などの活動を組み合わせる。どれか一つというよりも、関係が多様になり、動物の生態に気づきやすくなる。

愛着のある個別的关系を作っていく。どの動物の名前を付けられるような個体とのしての関わりが子ども側から成り立つ必要がある。そう出会ってこそ、愛情もわくし、継続的に関わる気にもなる。

応答的情動的交流を育てる。冷静に観察し、認識を進めるといことはあるいは上の年齢では可能かもしれないが、幼児・小学生ではとりわけ、喜び、悲しみ、驚きといった感情が喚起されることで関係は深まる。また、その根本には相手となる動物との応答的關係が成り立つことがあるだろう。そこから生まれる感情がさらに動物の表情や仕草の愛らしさなどで強化されていく。

生態に関わる体験から気づきへの経路を作る。単に動物に関わるだけでなく、その動物の習性やどのような場で暮らすのかまで理解できるように、住まいや餌などについても世話をし、やり方を把握する。そこから、動物とその生態的な場とが切り離せない関係のことに気づいていく。

2 飼育の効果について実証のポイント

動物についての気づき、生命への気づき・感性、さらに思いやり等が検討出来よう。その順で確認していくべきであろう。

まず、子どもの扱い方がその飼育している動物にふさわしいか。人形やおもちゃのような扱いから脱していくか。その動物固有の扱い方をするようになるか。動物固有の様子に気づくか。観察力を伸ばすということである。その動物の独自の習性が分かるだろうか。動物や生き物への感性・感覚の広がり成り立つか。その生き物としての特徴に敏感になり、存在に気づき、関心を持ち、大事にしようとするか。きれいなまた可愛いものだけでなく、幅広く関わっていかうとするか。

3 命の教育の基本として

生物の多様性に気づくようにする。生物には実に様々なものがある。その多様性が生物の特徴であるとともに、多様性を保持することが生命を大事にすることの基本にある。生命の生きる場は多種多様であることが分かる。生き物はその生きる場と切り離せない。それが「生態」ということの意味である。ペットの飼育のみに寄ると、そのことを忘れやすい。多少とも人間の生活と同一でない場で生息する動物の飼育が学校で意味が出てくる。



命あることは身体の活動・動きからなるのだから、その多様なあり方に出会うようにする。移動の仕方にしても、歩く、跳ねる、走る、這う、飛ぶ、泳ぐ。また各々に独自の様々な動きがある。それは見るだけでなく、触ったり、追ったりする中で感じ取れる。

生まれ、成長し、衰え、死ぬ存在として、その過程を知る。それを実感する機会をいかに作るか。無駄無しではなく、意義ある死に出会えるにはどうしたらよいか肝腎である。

4 学校関係者の誤解を解く

学校関係者の中に動物の飼育に対する基本的な誤解があり、それが学校における動物飼育を拒否したり、また適切でない飼い方に導いているのではないだろうか。

飼い方を子どもの発見に委ねるのがよいのではない。飼い方まで発見しては残酷な仕打ちを教えることになる。また、適切な飼い方の指導の上に子どもによる豊かな発見が十分に成り立つ。

自然・野生に近づければよいのではない。自然・野生への幻想を捨てる。野生の動物の生態への誤解がある。その上、そのまま、がよいのではない。飼育の際の清潔さとか餌のやり方は固定的な野生の動物のステレオタイプのイメージにとらえず、ペットとして考える方がよい。動物に接すると自ずと命の教育になるのではない。継続的個別で愛情のある世話を通して、愛着を抱き、動物の特徴や生態を理解していくことを通して可能になる。教師だけや子どもだけの活動にすることが大事なのではない。無知なままで自力で行うことには価値はない。学校外の保護者や専門家の援助を得て、連携を進める。それでも苦労はあるが、意義ある活動となるだろう。

(白梅学園大学学長、お茶の水女子大学客員教授)